

東京大空襲の悲劇を

若者達の心へ伝える人

浅見洋子詩集『独りぼっちの人生』^{せいかつ}に寄せて

鈴木比佐雄

1
浅見洋子さんの肉声は、とてもおだやかで聞き手に安心感を与える。長年「ニッポン放送のテレホン人生相談回答者」の一人として活躍されているのは、きっと、生きるか死ぬかといった苦悩し生存の危機にいる人びとの話を受け止めて寄り添いながら、本人が少しでも前向きに現実立ち向かっていくように、生きるための精神的な力を言葉で与えることの可能性を探ってきたからだろう。浅見さんの肉声に初めて接したのは、確か二〇〇八年の暮れごろだったと思う。翌年の二〇〇九年三月十日に刊行する『大空襲三一〇人

詩集』の編集の最中に、詩友から東京大空襲に家族が遭遇してそれを詩作している浅見洋子という詩人がいると教えてもらった。すぐに電話をしたところ、浅見さんは私が生れた東京都荒川区南千住三丁目に隣接した南千住五丁目に実家があったという。以前、早乙女勝元さんが館長をされている東京大空襲資料センターで空襲による戦災地図を調べてもらったことがある。私の実家の南千住三丁目附近で焼夷弾の火は止まっていた。私は物心ついたところから、南千住から浅草や上野まで焼け跡が広がっていたなどと、祖父母から何度も東京大空襲の話聞いていた。石炭屋だったので貯炭場と馬屋が焼けたが、住まいの方は焼け残ったといわれていたので、その詳細な焼失地図を見て、祖父母から聞いたことを再認識できた。戦災地図の記憶では、浅見さんの実家があった五丁目は、工場も多く全て焼失していた地域だった。浅見さ

んは一九四九年の戦後生まれだが、旋盤工場を経営していた父母と兄二人・姉三人の七人は、炎の中を逃げて命だけは助かったという。けれどもその時の体験が長男のマサヒロの後の人生を大きく狂わせていった。また浅見さんの人生も、家族から孤立し酒などで身体を壊していった兄の唯一の理解者であったがゆえに、後に東京大空襲に遭遇した家族の苦悩を世に伝えていく役目を選択することになる。私は浅見さんと話しながら、自分たちが東京大空襲を経験していないのに、家族の話の思い起こしながら、あたかも東京大空襲に遭遇しているような錯覚を覚えたものだった。

そんな出会いの中で、浅見洋子さんは『大空襲三一〇人詩集』に詩「独りぼっちの人生」と「三月十日 三ノ輪の町で」を寄稿してくれた。『大空襲三一〇人詩集』の中で東京大空襲については宗左近さんの「炎える母」を冒頭にして五十篇も

の詩が収録されたが、浅見さんの詩は、戦災孤児の気持ちを掬い上げたとてもリアリティのある詩篇だった。父母や兄姉たちや大空襲によつて運命を変えられた兄のような子供たちの思いを後世に伝える役目を浅見さんは負っていて、その使命感が驚くべき表現のエネルギーを呼び寄せた長編詩に結実されていくのだろう。どうして浅見洋子という詩人が誕生し今も旺盛な詩作活動が継続されているのか、新詩集に触れる前に、既刊の詩集から浅見さんの試みを辿ってみたい。

2

浅見洋子さんは今回の詩集が詩画集を除くと七冊目となる。第一詩集『歩道橋』は一九八四年で三十五歳の時に刊行された。第二詩集『交差点』は一九八七年、第三詩集『隅田川の堤』は一九八九年であり、この三詩集は自己史であり家

族史であり、また大空襲から生き延びた下町の家が戦後にどのような苦難を受けて、それを克服しようとして悪戦苦闘してきたかが赤裸々に記述されている詩篇群だ。浅見さんの文体には、これを書くことによって死の淵から生の世界の扉を開いていくような、独りの若き女性の精神のドラマが生きて描かれている。私はこの三部作を今回初めて読んでみて、浅見さんのような立場におかれたなら、人はこのように家族のために身を投げ出して献身的に生き、さらにはその環境からも自立して強く生きること出来るだろうか、と自らに問うてくる感動的な長編詩であることを痛感した。

第一詩集『歩道橋』は、一章の小詩集「歩道橋」八篇、二章「あしたは」五篇、三章「十八才のわたし」十篇、四章「大きい兄さん」六篇である計二十九篇から成り立っている。この詩集の全篇はアルコールや薬物の依存症の十三歳上の長兄

を暗示している。第四章「大きい兄さん」は、死んだ兄さんへ乗り移ったように酒を呑む楽しさや苦しさ、そうでしか生きられなかった兄の思いを代弁している。

第二詩集『交差点』は、次女の姉夫婦の小さな町工場が破産の危機に陥っているのを手伝い、姉と浅見さんが営業を引き受けて、新しい仕事を確保しながら、社会的にも認知される会社にして軌道に乗せていった家族・親族間の団結をリアルに書き記していく。しかしその事業の成功や父の遺産相続によって浅見さんは、姉夫婦たちと冷たい関係になっていき、姉夫婦の会社から身を引き、自立の道をはかっていく。浅見さんの心は、そんな家族・親族間の軋轢の中でも、自己の利益を優先しない皆のことを考えた公平な判断をしていく。そのような辛い詩が多いのだが、例えば家族の中の理解者である長姉との会話で成り立っている

との関わりを記した詩群である。浅見さんがこの詩集を書くことによって、兄に翻弄された時間を、自らの時間として再び生き直していこうとする精神の強靱さを感じた。「歩道橋」の八篇は、死を間近に感じた兄が正気を取り戻して、唯一の理解者である妹に感謝の気持ちや残される妹に遺言としての人生の助言を伝える詩篇だ。二章「あしたは」は、兄が酒や薬物に溺れて家族に家庭内暴力を振るう凄まじい場面を回想する詩篇だ。浅見さんも包丁を振り回す兄に立ち向かい、命を掛けて狂気の兄に昔の心を取り戻させようとする。三章「十八才のわたし」は、そんな自暴自棄の兄を抱えて、十八才の浅見さんは同世代が感じる夢や希望が少しも感じられずに、「生きていること自体が／せのびなのか」というように、死んだ方が楽になると思い始めていく。浅見さんが兄を含めた家族間の軋轢で自殺未遂をするまで苦悩したこと

「日曜日の朝」などは、利害や感情が複雑に絡み合った家族であるけれども、どこか清々しさがあり、重たいテーマであるにもかかわらず、読む者に救いと希望を与えてくれる。

第三詩集『隅田川の堤』は、もはや浅見さんが何も恐れることなく、戦前戦後の東京下町の隅田川沿いに暮らす家族の歴史を語り始める。そこには東京大震災も、東京大空襲にも遭遇した、東京下町で生き抜いてきた零細企業の家族の赤裸々な姿が等身大で淡々と記述されている。長兄がアル中になり身体をボロボロにしながらも生きようと願い、迷惑を掛け続けた家族を思いやる心を捨てていなかったことに、浅見さんは人の良き面を思い起こしながら生きていこうと決意されたように思われる。私はそんな浅見さんの決して逃げない姿勢や、人間の弱さの中を直視して、本当の人間の強さとはどういふことかと問うてくる詩篇にと

でも感銘を与えられた。

この三冊の詩集はどれも、けやき書房で刊行されていて、カバーが布張りでタイトルが金箔で、しつかりした箱付きだ。編集も浅見さんの魅力を充分に引き出している。また発行者の早船ぐみおさんがとても丁寧な解説を書いている。きつと浅見さんを励まして内容に相応しい造本で、浅見さんを世に広めたいと心から願った優れた編集者であつたに違いない。

3

その後には詩画集『母さんの海』を刊行し、浅見さんは、五十歳になった一九九九年に第四詩集『もぎ取られた青春』を出版した。第三詩集『隅田川の堤』から十二年が過ぎていた。あとがきによると、兄が死んでから六年後に水俣病支援の運動に関わるようになった。また共通の知人でも

あつた敬愛する弁護士が縁結びをしてくれ原田敬三弁護士と結婚された。浅見さんは亡くなる前に兄が願っていたとおりに、四十五歳で同志ともいえる伴侶を得た。その十数年間に書かれた『もぎ取られた青春』は、一章「わたしの水俣」六篇、二章「もぎ取られた青春」六篇、三章「いのち」二篇の十四篇から成り立っている。この詩集によって浅見さんは、戦後の企業と政府が一体となつて引き起こした人間の生命軽視と環境破壊の最大の事件だった水俣病被害者に深く関わっていった。冒頭の詩「不知火の海」を引用してみる。

不知火の海

働かない 海がある
働けない 海がある
沈黙の海 不知火の海

夏雲の影を のみこみ
つきぬける青空を のみこみ

三〇幾余も 沈黙をつづける
不知火の海が 拡がる

有機水銀を のみこみ
海に生きた たくさんの人の
苦しみを のみこんだまま
不知火の海が 拡がる

働かない 海がある
働けない 海が拡がる

私がこの詩を読んで驚いたことは、浅見さんが有機水銀によつて生態系を壊されて、自然の循環

作用が出来なくなった水俣湾の「海の死」を直視し、海の悲しみに耳を澄ませていることだった。そしてその海を愛し先祖からこの水俣に定住し暮らしてきた人びとの悲しみに肉迫していき、詩人としても誠実な態度が詩行から立ち昇り感受できたことだった。きつと水俣病の関係者たちは、故郷を失う者の悲しみに触れたこの詩を読んで浅見さんが自分たちの代弁者であると気付いたのではないだろうか。その後の詩篇も水俣病になり肉体のハンデのある若者の内面の苦悩に寄り添い、共にその苦悩を分け合い理解しようと努めていく。これらの詩を書くためには、浅見さんが水俣に行き、患者の施設の中で日常的な支援活動をしてきたからこそ、浅見さんに心の奥底を開いていったのだろうと推測できる。二章「もぎ取られた青春」では、学校内の事故で死んでいった子供たちの両親の思いを受け止めて、子供がどのような情

況の中で死んだのかという事実の解明と、学校や行政の責任のあり方を問うている重要なテーマをあえて詩作してくれている。今まで泣き寝入りだった残された親御さんにとって、原田敬三弁護士と浅見洋子さんは、きつと頼もしい存在であったに違いない。その意味でこの詩集『もぎ取られた青春』は、詩人としての浅見洋子の特長である、同時代の悲劇的な存在者を詩作のテーマに選び、その被害者の思いを代弁していくという試みを実践した詩集となったのだ。

二〇〇三年の第五詩集『マサヒロ兄さん』は、第一詩集・第二詩集・第三詩集の中から兄の詩篇を選んだものと、新たに兄の臨終場面や葬儀での家族と一人ひとりの複雑で繊細な思いが描かれている「葬儀の日」などが収録されて、浅見さんにとって兄については全て書き終えた気持ちであったろう。しかし詩「母ちゃん」には、マサヒロ兄

さんが東京大空襲の際に父母の代わりに弟や姉妹を守ったことが記されてあった。この詩篇が後に私家版の手作り詩集『三ノ輪の町で』を書く動機につながっていったのだろう。二〇〇九年には第六詩集『水俣のこころ』二十八篇が刊行された。この詩集によって、その題名の通り「水俣のこころ」は浅見さんを通して永遠に刻まれたのだった。

4

新詩集『独りぼっちの人生』は、「東京大空襲訴訟」原告の五人の戦災孤児がどのような境遇におかれたかを記している。また東京大空襲に遭遇した兄についても記している。第一章「独りぼっちの人生——六歳の智恵子」は、両親と二人の兄弟を亡くした石川智恵子さんについての五篇の連作詩篇だ。親戚に引取られたが彼女の食事は「小さい芋 一個か／一握りの ご飯だけ／みそ汁の

味も／お新香の 味も／知らないでいた」という。やせ細った智恵子が小学三年生になり、近所の人が見かねて子守をの世話をしてくれて、「めざしと みそ汁／子守先の家で 初めて／家族と同じ 食事をした」という。そんな境遇の智恵子さんに触れた原型となった詩は、二〇〇九年三月十日に刊行された『大空襲三一〇人詩集』に初出されたものだ。偶然にその詩選集を読んだ墨田区立文花中学校の美術の先生である深見響子先生は、浅見さんのその詩に感銘を受けて、コールサック社に二〇一〇年の夏ごろに電話をくれて、学校の授業で絵本を作らせたいので、浅見さんの詩を使用させて欲しいとの依頼があった。もちろんコールサック社は若い世代に戦争の悲劇を伝えていくという深見先生の試みに大賛成であり、浅見さんにも連絡を取って了承を得たので、浅見さんから深見先生に了解の電話を直接入れてもらうことに

した。深見先生は三年生の美術の時間に六十一名の生徒に浅見さんの詩を読ませて感想文を書かせた後に、十数頁の絵本の製作を試みさせた。その生徒たちは深見先生のアドバイスを受けながら卒業までにこつこつと製作に励んだ。二〇一一年の今年になり浅見さんの事務所に入ってから子供たちの絵本を見せたいとのことだった。その六十一冊の絵本を見た浅見さんは、子供たちの理解力や表現力に驚き、どんなにか嬉しく思っただろう。しかしその詩の主人公である石川智恵子さんが昨年亡くなっていたので、石川さんに伝えられなくて、とても残念な思いを抱いただろう。けれども石川さんのような戦災孤児の思いが今の若い子供たちにも確実に伝わった手ごたえを浅見さんから聞いて、民衆の歴史を伝えていくためには、改めて深見先生のような教育者の存在が大切であることを私は痛感した。この絵本の出来事が浅見

さんの詩作力に火を点けたように思われる。その後、第二章「こわれた心——一歳の幸一」、第三章の「うばわれた魂——三歳の由美子」、第五章の「沈黙をすて——一二歳の紘子」、第六章の「六六年目の おびえ——九歳の和子」と、兄についての四章「三ノ輪の町で——八歳のマサヒロ」などの草稿を見て欲しいとの連絡があり、浅見さんの事務所で打ち合わせをした。その際に六十数名の絵本を拝見し、その表紙絵や中の絵を入れたカラー頁を私は提案した。深見先生と生徒たちの思いやその実践もまた後世に伝えたいと願ったからだ。浅見さんの詩「独りぼっちの人生」はこのような拡がりをもった詩篇であり、今後も多く読者を獲得するだろうと作品が雄弁に語っている。

最後に「独りぼっちの人生——六歳の智恵子」の中の最後の詩篇「祈り」を引用したい。石川智恵子さんがなぜ「東京大空襲訴訟」の原告になっ

たか。浅見さんがどうして智恵子さんの詩を書くようになったのか。二人の出会いからこの詩集が始まったことを知ることが出来る。そして二度と空襲・空爆によつてこのような悲劇が世界中のあらゆる場所で起らないように、私は浅見さんによつて伝えられた六名の東京大空襲の悲劇と戦後の苦難の経験を多くの人びとに読んで欲しいと願っている。

祈り

出された茶には

手をつけず

淡々と話す 智恵子

彼女は 五三歳の時

蜘蛛膜下出血し

生死を さ迷ったそうだ

その時の事を

子どもが 話してくれた

—— 凄く 怯えていたよ

—— 苦しそうに 叫んでいたよ

—— 母さんは 大変な苦勞を

して来たんだなと 思ったよ

と 嬉しそうに語った

彼女には 今でも

後遺症があるそうだ

六歳で止まった

壊されたままの

心の時計

不安と恐怖と怒り

家族を慕う

狂おしい 孤独

わたしは 涙を押しかくし

新しい茶を 入れかえながら

彼女の心の

癒される日が来ることを

智恵子さんの怒りが

解かれる日を 願った

浅見洋子詩集『独りぼつちの人生』せいかう 栞解説文
鈴木比佐雄

コールサック社
2011